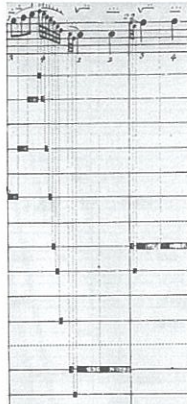


「機械じかけの音楽」という言葉から皆さんは何を連想するでしょうか？

音楽を機械で自動的に演奏させるというアイデアは、アリストテレスの著作中に既にみられます。古代ギリシャで考えられた様々な機械の構造は中近東地域に受け継がれ、中世になって再びヨーロッパに輸入されることで新たな展開をみせることとなります。

音階に合わせた鐘を使い、あるメロディーを決まった時間に演奏する教会の時計は、中世ヨーロッパにおける代表的な自動演奏楽器といえるでしょう。このようなものが多く作られるにいたった背景には、様々な音が美しい調べにのって奏でられる音楽と正確に時を刻む時計とが、いずれも調和と秩序をもって運行している宇宙を象徴するものとして存在していたからだと考えられます。

巨大で複雑な構造をもつパイプオルガンが教会で欠かせないのも、そのような思想があるからでしょう。空気を入れ、鍵盤を押さえさえすれば音が出るオルガンは、自動的に演奏させるのに適した楽器でもあります。17世紀にはすでに自動オルガンが発明され、小型の手回しオルガンは多くの地域で普及していくことになりました。また、このような演奏の自動化という流れは、18世紀半ばに演奏の記録と再生への関心を生み出します。この展覧会では、約230年前の演奏記録(写真1)を元にしたコンピュータによる再生を行う予定です。



1 「18世紀の演奏記録」

産業革命後の近代になると、機械の存在は日常的になっていきます。正確にリズムを刻むメトロノーム等、音楽家にとっても機械は必要不可欠なものになったようです。20世紀初めには、記録した演奏を再生できる、ピアノロールによる自動演奏ピアノなどが普及します。ストラヴィンスキーや Hindemith など、当時の若い作曲家は積極的にこれらを利用し、自動楽器専用の作品を作りました(写真2)。

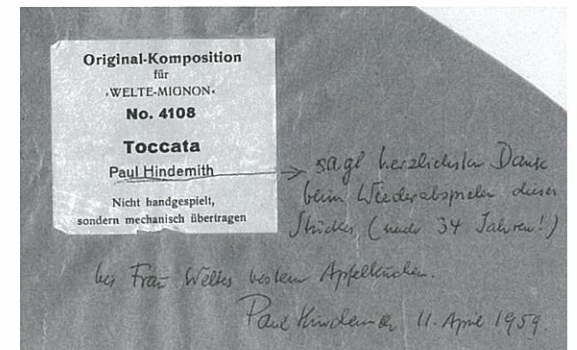
この展覧会の中心にマーティン・リッチズ (Martin Riches, 1942~) の作品群があります。現代のベルリンに住むこのイギリス人アーティストは、多くの音楽機械作品 (Music Machines) を発表しています。今回紹介する「Flute Playing Machine」(表紙写真) や「Serinette (鳥オルガン)」(写真3)、「Clock V」などは、現代アートの作品とはいえ機械と音楽との歴史的な関係と無縁でなりたっているものではないことがわかるでしょう。

機構は電子化されたとはいえ、現代においても自動演奏ピアノはポピュラーなものです。会期中には現代の自動演奏ピアノの演奏会も企画されています(協力: ヤマハ株式会社)。また、やはり本展で公開される本学の研究による自動作曲と自動伴奏のプログラム(写真4)は、現代と未来における「音楽」と「機械(技術)」を考える上で非常に示唆に富むものとなるでしょう。

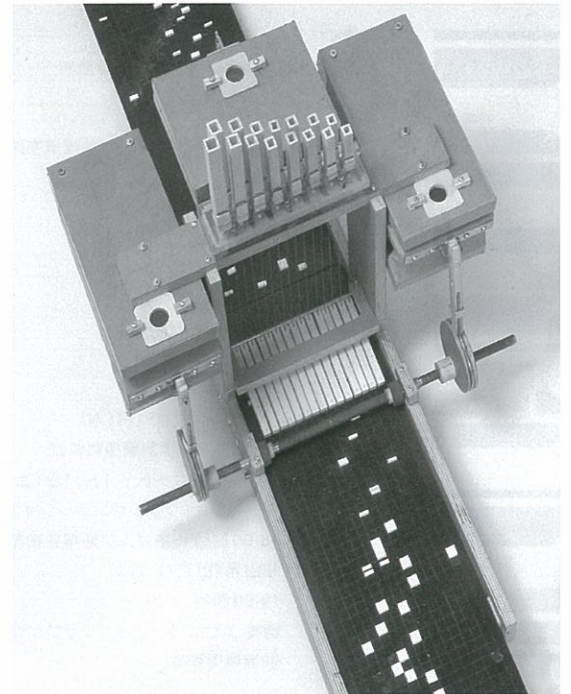
この展覧会は、日本学術振興会科学研究費補助金による「音楽文化における機械の役割—その歴史・現状に関する多面的分析と展望」研究グループ(研究代表者: ヘルマン・ゴチェフスキ本学准教授)によって企画されたものです。

関連イベント[東京大学駒場キャンパス内] 入場無料

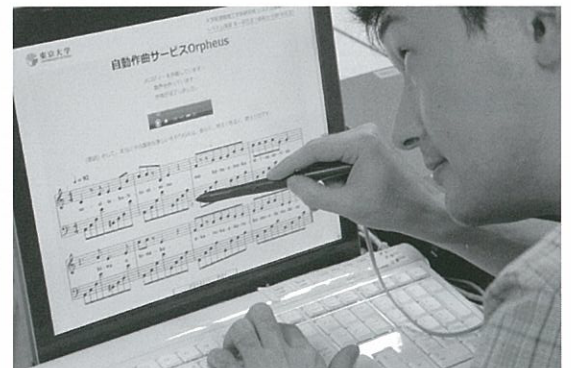
- ギャラリートーク 毎週日曜日14:00開始 東京大学駒場博物館
- ワークショップ 不定期(参加者=大学院生のみ) 東京大学駒場博物館 後援: ドイツ学術交流会(DAAD)
- 国際シンポジウム 12月1日(土) 学際交流ホール、2日(日) 18号館ホール
- 記念コンサート 自動ピアノ演奏会 10月31日(水) 18:30開始 東京大学駒場博物館2F



2 「Hindemith自筆のピアノロール」(Augustinermuseum Freiburg)



3 「Serinette (Martin Riches)」 Photo by Roman März



4 「自動作曲サービス Orpheus」(本学工学研究科嵯峨山研)

